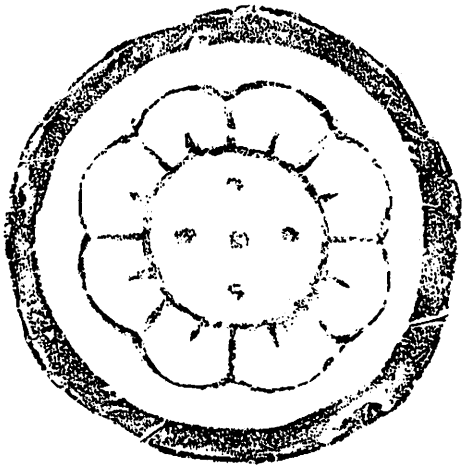
平安京六角堂跡第二次発掘調査概報



財團法人　古　代　學　協　會

平　安　京　調　査　本　部

昭和55年2月

平安京六角堂跡

第二次発掘調査概報

ページ

1　はじめに……2

2　発掘調査の経過……3

3　遺　　構……5

(1)　溝状遺構……5

(2)　土　壙　1……8

(3)　土壙2，3，4……8

(4)　柱　　穴……8

4　遺　　物……9

(1)　軒　瓦　類……9

(2)　陶磁器類……9

(3)　土師器類……11

(4)　その他の遺物……11

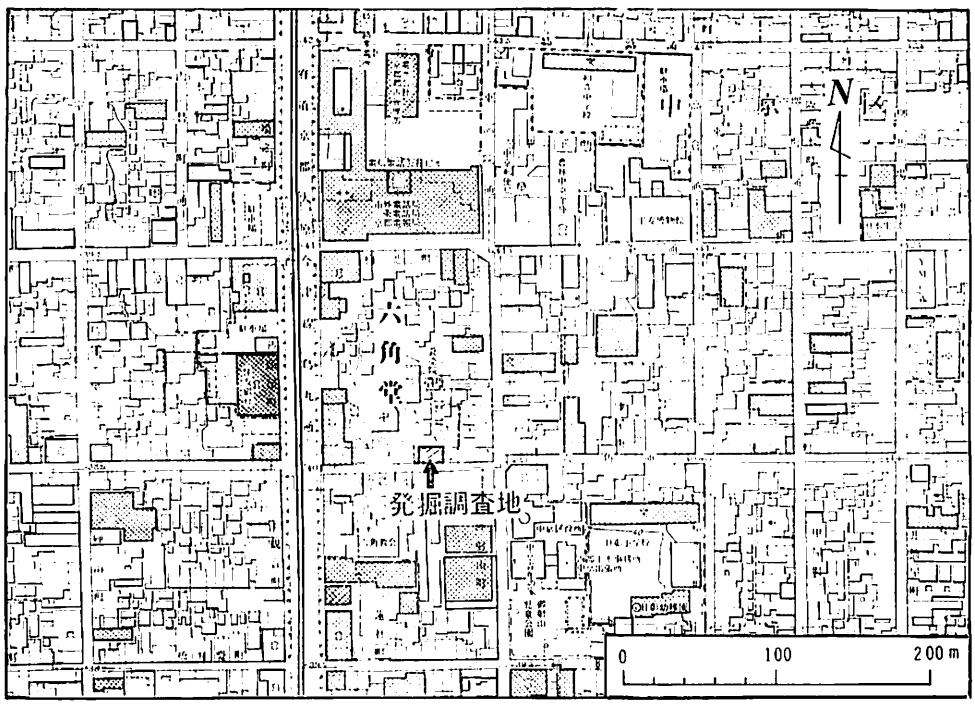
5　調査総括……12

6　後　　記……16

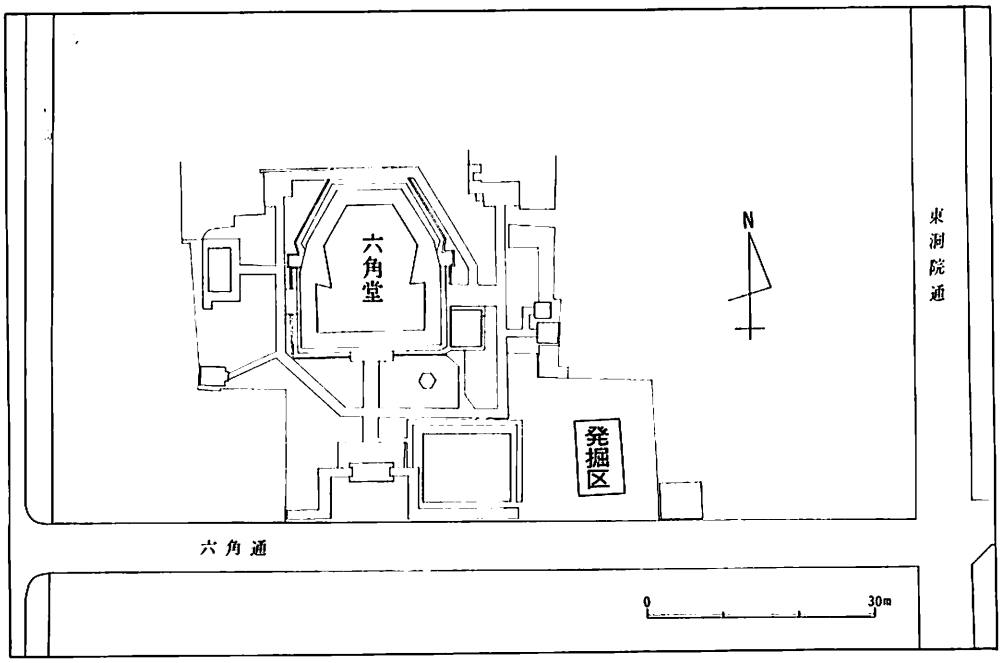
1 はじめに

財団法人池坊華道会は，京都市中京区六角通東洞院西入ル堂之前町，六角堂境内寺務所跡地において，六角堂の参籠施設である<頂法寺参籠>の新築を計画し，建設工事に際して事前の発掘調査を財団法人古代学協会へ依頼した。該当する敷地は一般には『六角堂』という通称でよく知られる天台宗の寺院，紫雲山頂法寺の境内にあたり，平安以来の伽藍遺構や京の旧街路『六角小路』北側の舗設等の検出等も期待される要地である。既に昭和49年から50年にかけて，(財)古代学協会では同じ頂法寺境内において発掘調査を実施しており，その成果も公にされているが*，その縁もあり，また同寺域に関する研究をより一層進めるべく（財）古代学協会，平安京調査本部では（財）池坊華道会の依頼を容れ，前記敷地内において発掘調査を実施した。調査の所在地と調査期間，調査組織の構成は以下の通りである。

発掘調査所在地	京都市中京区六角通東洞院西入ル堂之前町248番地
調査期間	昭和52年6月20日～同年7月10日
調査依頼者	財団法人　池坊華道会　理事長　池坊　専永
調査主体者	平安京調査本部　本部長　有光　次郎
調査担当者	平安京調査本部　佐々木　英夫
調査員	平安京調査本部　松井　忠春（現京都府）



第1図　発掘調査地位置図



第2図　発掘地付近平面実測図

調査補助員　　角髙裕子，片山淳子，木村　滋，鈴木俊則，髙野雅樹，谷川友紳，成川雅治，原田雅裕，三宅憲明，村山ちぐさ，山下武久，渡辺美栄子

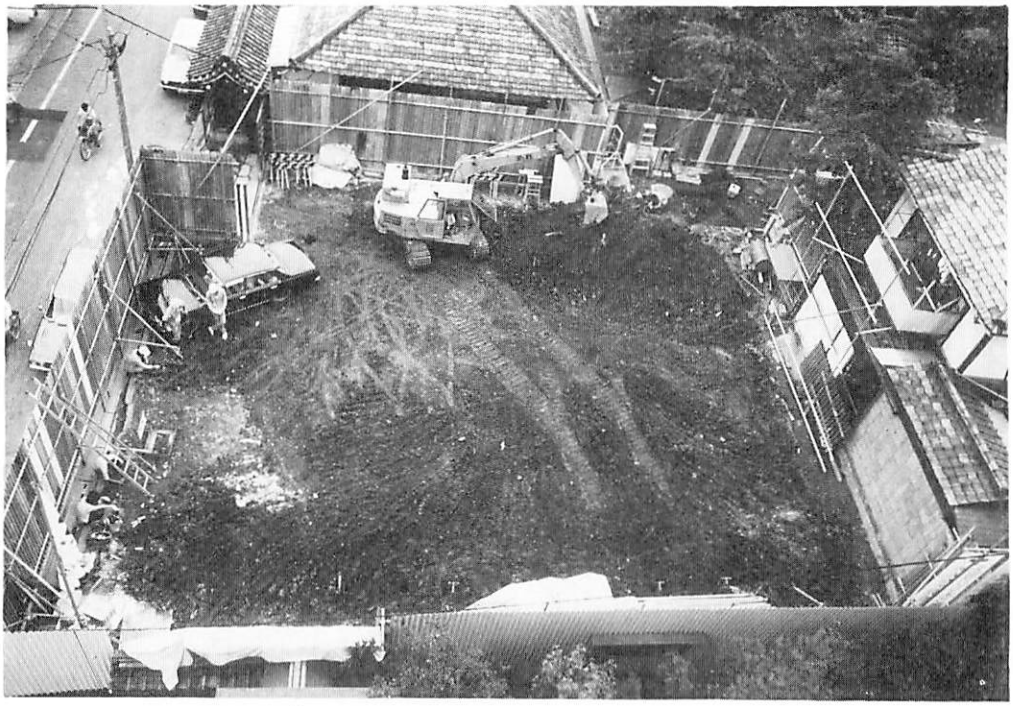
尚，本報告中の図版類については主に松井忠春が作製し，報告文については一部松井の意見を入れて佐々木英夫が執筆した。編集は佐々木が行ない，平安京調査本部飯島武次の協力を得た。

＊註　甲元真之・佐々木英夫・松井忠春・朧谷寿『平安京六角堂の発掘調査』(『平安京跡発掘調査報告第三輯』，京都，昭和52年)

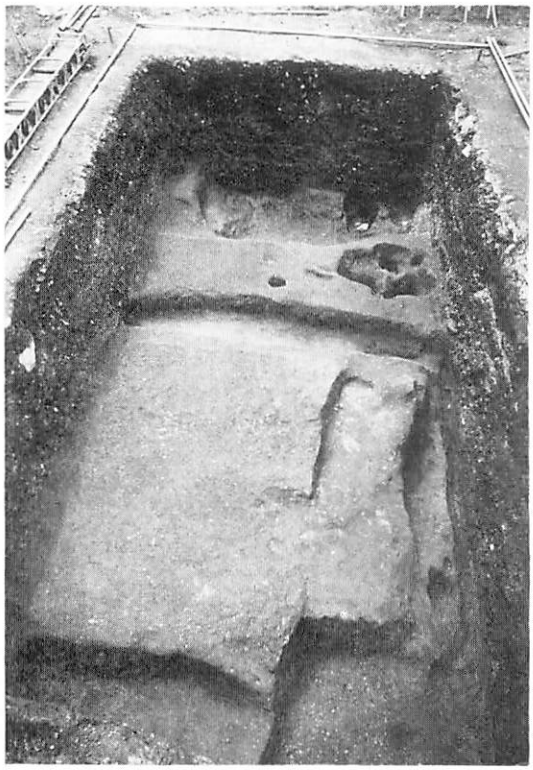
2　発掘調査の経過

発掘地は今日の六角通北側に位置し，紫雲山頂法寺南門の東側，本堂たる『六角堂』の東南の方角にあたる（第1，2図参照)。該当の敷地はほぼ200㎡であったが（第3図)，『頂法寺参籠』の建設予定地に合わせて，敷地内東側において東西6m，南北10m（60㎡）の発掘区域を設定し昭和52年6月20日より調査を実施した。

六角堂境内での前回の調査（昭和49年～50年）では，発掘地上層で近世の焼土層が比較的明瞭に検出され，原因となった六角堂焼亡の時期と文献上の資料とが対照されている。今回の発掘においても，同様に近世の焼土層が検出されると予想されたので，前回の調査区域につなが



第3図　発掘地全景（東から，左端は六角通）



第4図　発掘区全景（完掘後，北から）

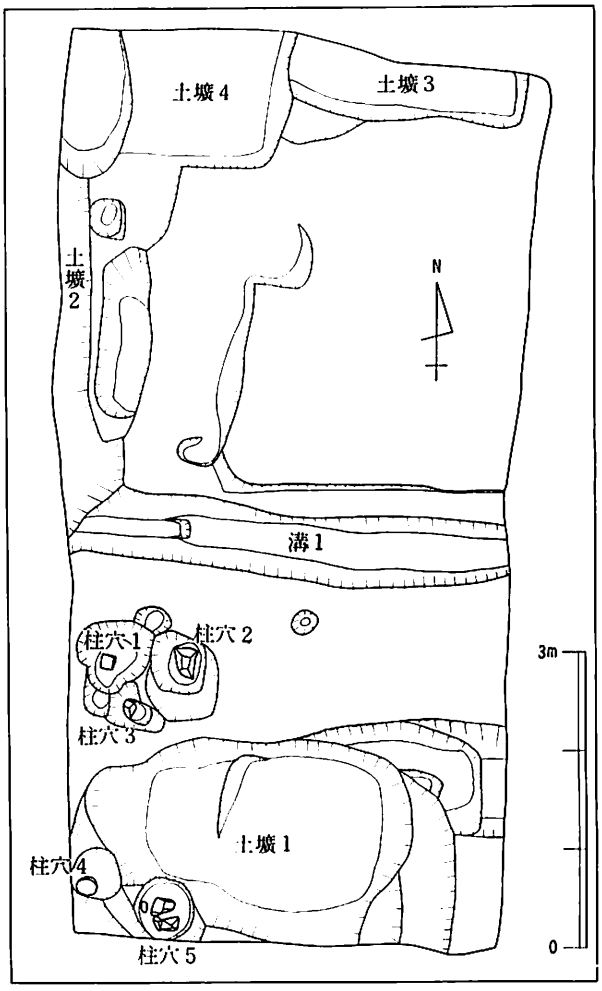
る発掘区北・西側で慎重に層序の検討を行った。

一方，今後の発掘調査の指針を得る目的で，発掘区の南北両側の中央部付近で約2m×2mの広さのテスト・ピットを開削し試掘を実施した。この試掘の結果，現地表下200cmほどで安定した層が確認されたが，南・北いずれの試掘坑においても，著しい層序の攪乱が認められた。ただ，北側の試掘坑の場合，部分的ではあるが，より高いレヴェルまで近世の焼土層の残存が認められた。この結果から，発掘区全域にわたって現表土よりマイナス160cmのレヴェルまで，パワーショベルを使用して一回40～50cmずつ4回にわけて掘削作業を進めた。

調査の終了した段階では，近世の焼土

層が，予測した通り発掘区西北部で若干確認されたが，今回の発掘区全域に及ぶ遺構の存在は如何なるレヴェルにおいても検出されなかった。このため，近世の焼土層については前回の調査結果との対応関係を考察するだけにとどめた。遺構・遺物について若干言及すると，発掘区中央で東西に走る溝状遺構(溝１)，溝南側の平安末から鎌倉期の遺物を出土した土壙(土壙１)，その西側で検出された柱穴（柱穴１～５）等が主な遺構であり，遺物としては，土壙１から検出された平安末～鎌倉期の瓦当を含む瓦片類の他，前回の調査でも夥しく出土した近世の陶磁器類が大部分を占め，唐津焼の碗（第14図41）など往時の六角堂の隆勢をうかがわせる優品も検出されている。

以上の経過をへて，今回の発掘調査は昭和52年７月10日に終了した。



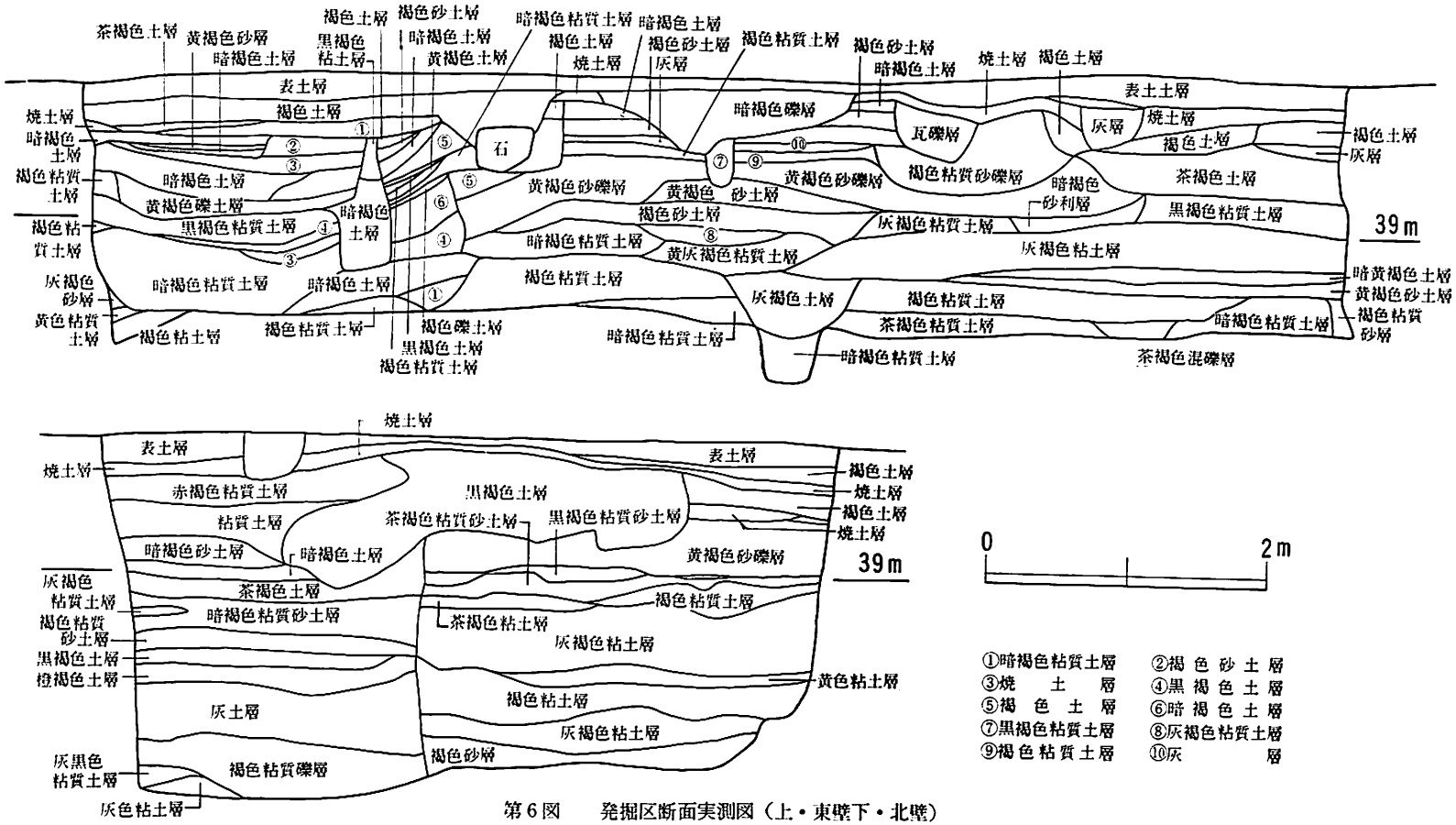
第５図　発掘区平面実測図

３　遺　　構

(1) 溝状遺構

今回の調査で注目されるのは，中央を東西に走る溝状遺構（溝１）の存在である。地表下マイナス160cmでパワーショベルによる機械掘りから手掘に切換えた直後，発掘区中央部を南北に分ける溝状の遺構を検出した。このレヴェルでは，溝の肩幅は約90cmであった。この溝を境として，南側は攪乱されていたが，溝の北側ではほぼ全面にわたって焼土と黄褐色土の混じった比較的安定した面が認められた。この面は，ひとまず近世初頭のものと判定されたが，建築またはそれに伴う遺構の存在は検証されていない。

このレヴェルで遺構の検出を進め，前記の溝状遺構を精査した。溝１の北側西壁に接し方型

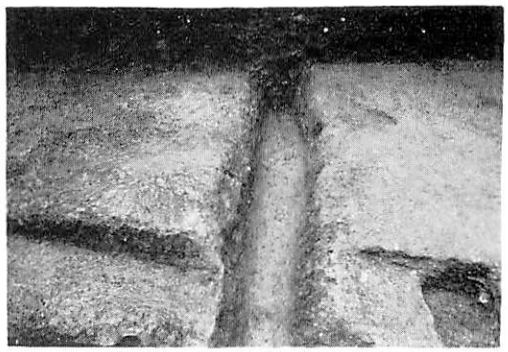


第6図　発掘区断面実測図（上・東壁下・北壁）

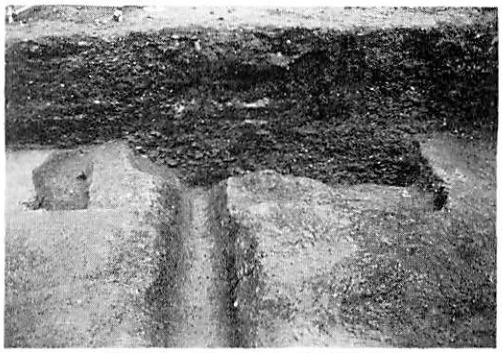
の落込が認められ，地表よりマイナス210cmのレヴェルまで近世初期のものと判定される瓦片，志野焼等の陶磁器片が検出されたが，溝の南側では上層から続く攪乱が続いていた。この攪乱の時期については，混入遺物や層序から判断して近世初頭であると結論される。

この溝状遺構は，層序や埋没情況から判断して少なくとも三時期にわたって使用されていたと考えられるが，発掘時においては溝最上面（地表下約170cm）より下方へ55cmほど，室町時代後半と思われる軒丸瓦，軒平瓦，丸・平瓦，棟瓦，鬼瓦等の瓦片が間隙なく埋っており，その内幾例かは前回の調査の際検出されたものと酷似している。この溝1の性格について推論すると，現在の頂法寺の南門の位置を東に延長したライン上に，ほぼ一致して溝が東西に走っている事実は極めて示唆に富んでいるように思われる（第2図）。古代学協会の作図による平安京条坊の復原推定図において，六角小路の北側付近が今回の溝1の位置と同じであり，発掘調査前の予測を裏付ける結果となっている。しかし，本来築垣もしくは築地塀等が構築されていたと考えられる溝1の北側では，そうした建築遺構に伴うと判断される痕跡は確認されなかった。ただ，溝1の北側東寄の部分，地表下170cmのところで，比較的安定した暗褐色の面を検出したものの，3㎡ほどの狭い範囲であり，築垣に伴う柱穴などの掘込痕もその面には認められなかった。

溝状遺構を精査すると，第6図の断面図からも明らかな通り，上・下二段の構造を呈しており，溝肩の部分が場所によって段

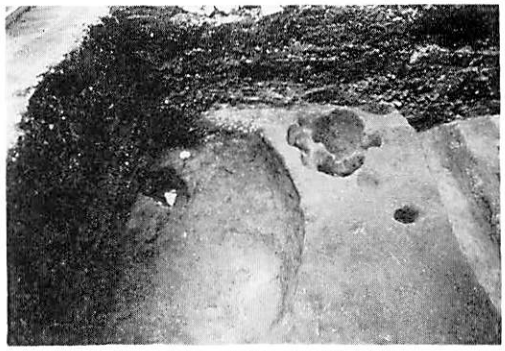


第7図　溝状遺構（東側）



第8図　溝状遺構（西側）

第9図　柱穴1，2，3



第10図　土壙1及び柱穴群

差があり，溝中の遺物類にも相当の時代差が認められた。この溝状遺構の開削が何時ごろまで遡れるかは明らかではないが，後述する南側落込（土壙１）と築垣遺構（柱穴１～５）との関係や層序，出土遺物等から検討して中世期中葉，具体的には鎌倉時代末期を上限としてよいのではないかと思われる。

(2) 土　壙　1

溝１の南側は大規模な掘込が認められ，不規則な土壙状を呈している。この土壙１に対して，東・西両側より数度にわたる上層からの掘込があったが，いずれも近世のものと判定されている。この土壙１の形成時期を確定する直接の手がかりは得られなかったが，掘込まれた部分を精査してゆく過程で，土中より緑釉土器片が検出されており，底部では蓮華文軒丸・軒平瓦，剣頭文軒丸・軒平瓦，渡来青磁碗，油指，土師碗・皿等が出土している。遺物自体は平安末期から鎌倉初期のものと判定され得るので，土壙１の形成時期もそれを大きく下らないものと考えられる。

(3) 土壙２，３，４

溝１の北側が発掘区内では数件の土壙，ピットが認められる。その内，西壁にそって位置し，溝１を西側で切込んだ形になっている土壙２では，その下部から中世期の遺物が出土している。見える範囲では，土壙２は南北に走る溝状を呈しているが，西側に延長してゆく性格を持つ遺構と判断されるので土壙として取り扱うこととする。溝１を切断している構造や，溝１上部の遺物よりやゝ遡る室町中後期の遺物が検出されている点からも，その形成された時間は室町時代後期と考えてよかろう。土壙３でも土壙２の出土遺物と時期の相前後する遺物が検出されていることでもあり，形成時期も大きな隔たりをもたないものと判断される。

土壙４は，切合い関係，出土遺物等からみて近世初頭の塵芥坑と思われる。貝殻や獣骨等の食物残滓の他に，黒化した有機質土が土壙一杯に埋っていた。なお，土壙４に接する西側の坑は近代の掘込である。

(4) 柱穴１，２，３，４，５

土壙１を含む発掘区南側掘込部分と溝１との間の地山面の西側，及び発掘西南隅の地点で，土壙１や溝１の形成時期よりも時代の遡ると思われる柱穴遺構群が検出された。いずれも底部に根石を残しており，一応，六角小路北側築垣の基礎とその掘方であろうと判断される。柱穴遺構１，２，３の南側2.8mほどでも２件の根石を持つ柱穴４，５が検出されているが，必ずしも同時期のものとは断定し難いし，同一の築垣に伴う遺構としては両者の距離が大きく，『延喜式』に言う小路の垣基幅五尺よりも広い。もっとも，一般の町屋の場合と違って，七（九）間の本堂を有する京内有数の寺院であった『六角堂』正面の築垣であれば，或いは大路級の舗設規模を持っていた可能性は残ろう。いずれにしても，平面図（第５図）に見られるように，かなりの長期間にわたって幾度か使用されたものと判断される。つまり，他の遺構よりもこれらの柱穴群の方が，より早い段階での六角小路の北側（恐らくは平安時代後～末期）を示してい

ると考えてよさそうである。換言すると，平安京六角小路の道路面は発掘区のより南側を通っていたものと結論される。

発掘区域内では，他に目立った遺構は認められなかった。検出された遺構全般から見て，今回の発掘区は六角小路の北側舗設及び頂法寺境内最南端に該当する位置にあったと判断され，平安京条坊の推定復原図の正確さを裏付ける結果となっている。

4 遺　　物

(1) 軒　瓦　類

今回の調査で出土した軒瓦類の内，平安後期から鎌倉初期にかけての製作になると思われるものは20点ある。全体を通じて完形の軒瓦は１点もなく，製作時期も区々であるが，すべて発掘区南側の土壙１最下部から出土している。

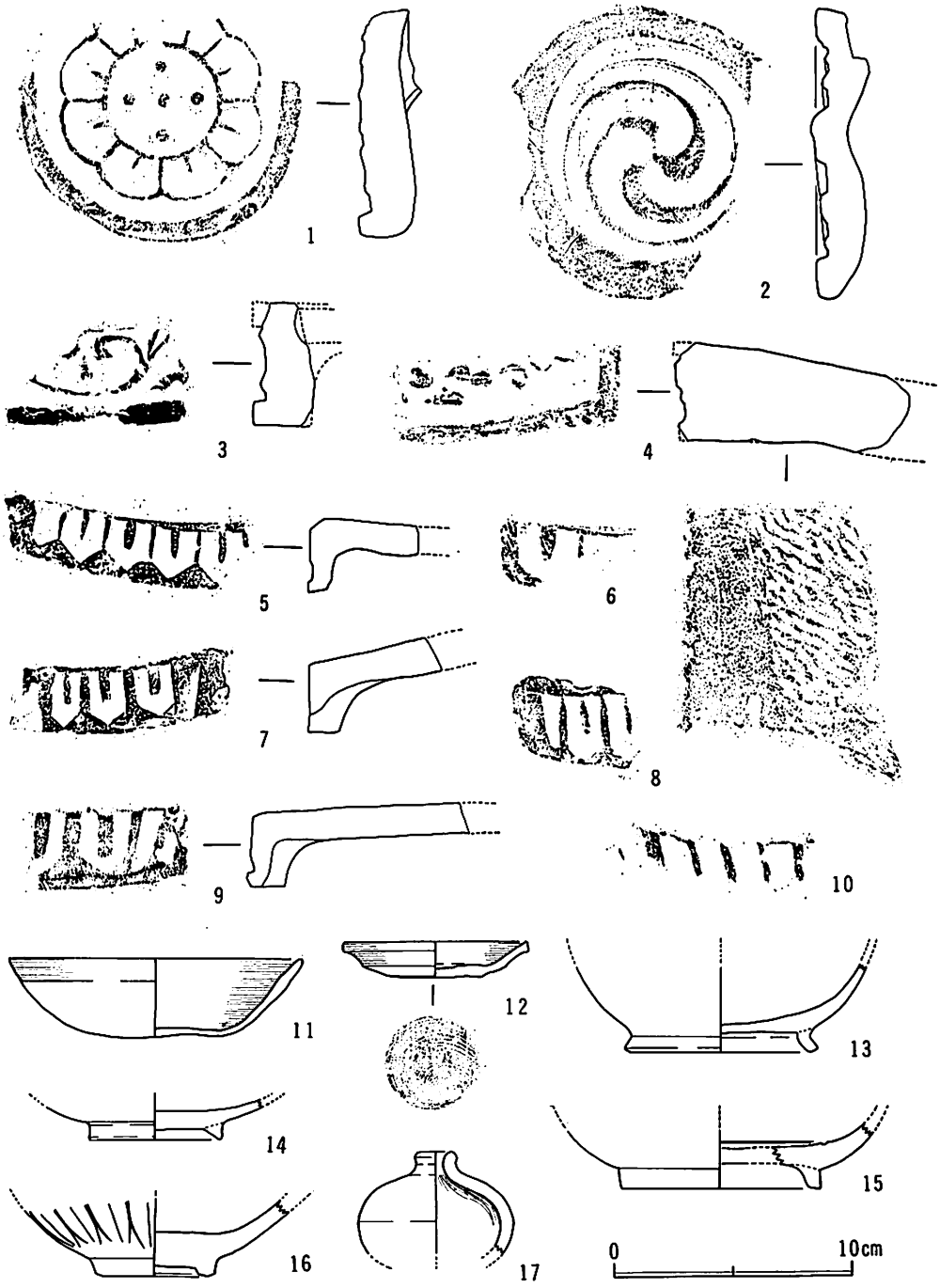
各個の瓦について若干の考察を述べると第14，15図（以下同じ）１の蓮華文軒丸瓦は，出土軒瓦の内でも時代的に早いものと考えられる。焼成・胎土等により所謂『播磨産』の瓦と判断され，同地方の製作によると見られる５の軒平瓦と対になっていた可能性が示唆される。六角堂近くの地下鉄烏丸線内遺跡で同笵品とおぼしき例が出土している。

２の巴文軒丸瓦は今回の調査での特徴的な遺物であり，２，３の他にもう１点同笵例があるし，確定し難い破片を含めればもう数点認められる。京都系の製作によるものと判定されるが，いうまでもなく８～14の剣頭文軒瓦と対になって葺かれていたと推定してさしつかえあるまい。これらの剣頭文軒瓦は，『折り曲げ』の構造を持つものが多く，一般論として平安時代の製作と判定することは困難であるが，軒丸瓦は必ずしも鎌倉まで下るとも思えないし，６の讃岐産の軒平瓦や７の京都播枝瓦窯の作になるらしい軒平瓦との共伴遺物であることからみても，平安最末期という推論を否定し得ない。これは，瓦当意匠として巴文と剣頭文が対になって使用される時期の問題ともからんで，早急に結論は出せないけれども，今回の出土遺物の頻度からみて１つの典型的な例として挙げることは許されるであろう。また，全体的に小ぶりで築垣に用いられていた瓦類と考えて大過ない。

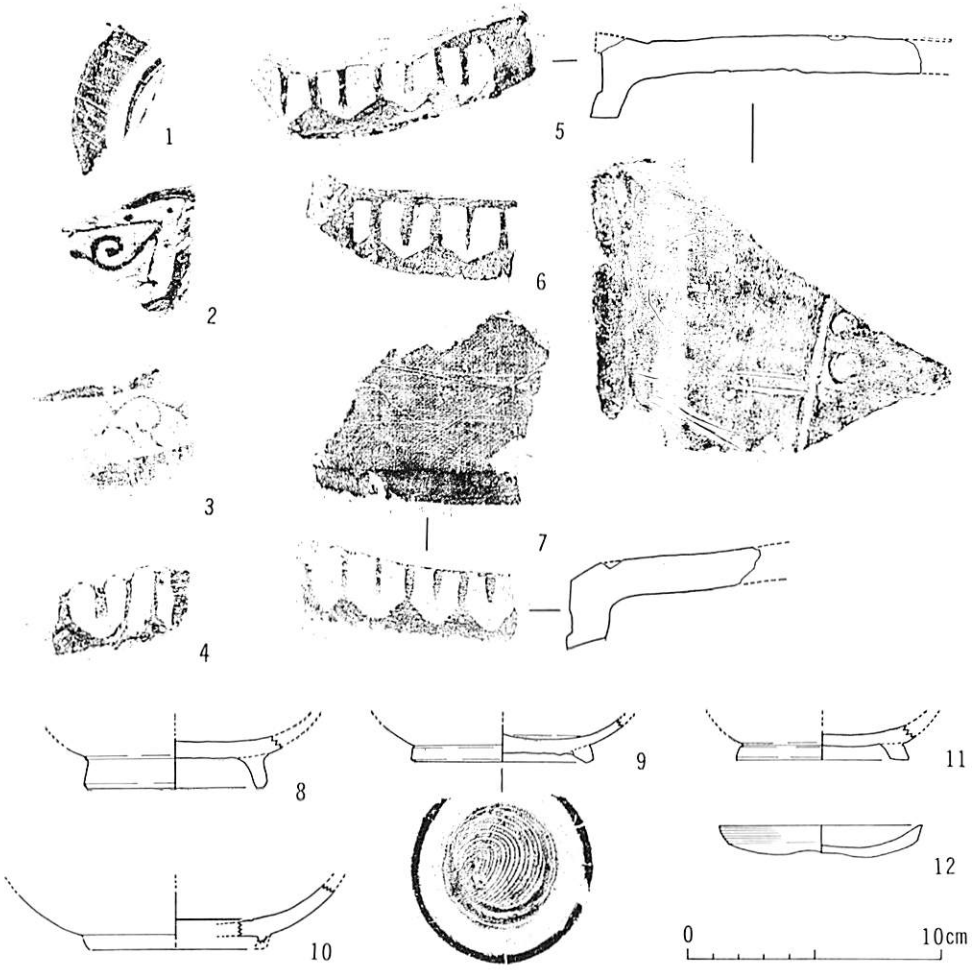
軒瓦類の他の例は比較的新しいもので，29の『六角堂』を図案化した瓦は前回の調査の際も出土しており，江戸時代後期の製作と思われるし，30の無文の軒丸瓦は江戸末期か明治初期のものであろうが，却ってモダンな印象を受ける。いずれも土壙４の上層攪乱部より出土した。

(2) 陶　磁　器　類

19，20は瀬戸系と思われる灰釉碗である。21は生産地不明の緑釉土器で焼成は比較的良好，12世紀前半の製作になろう。22は渡来青磁であろう，釉薬の酸化が著しい。23は油指と考えているが生産地不明。24は繊細な暗文が美しい磁器片で渡来物と思われる。以上はすべて土壙１より出土している。



第11図　出土遺物拓影・実測図1



第12図　出土遺物拓影・実測図2

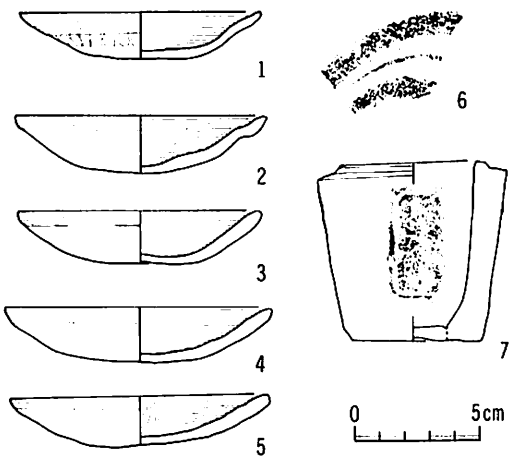
31以下は発掘区上層の攪乱部及び断面壁から検出された近世陶器類である。全体としては伊万里（40，41），美濃（34），信楽（35）系の諸雑器が多いけれども，31，32の如き唐津の優品も混在している。他はいわゆる『京焼』系（43等）のものが多く，近代の染付類も多数出土している。36～39は塩壺で，39では『泉湊伊織』の刻印が読める。（第13図7）

(3) 土　師　碗　皿

出土した土師碗，皿類は少なくないが，土壙1から出土したものを実測図（第13図）に掲げた。いずれも伴出した瓦類と同時期もしくは幾分下る時期に製作された例と考えられるが，実測断面図からもうかがえるように，必ずしも同じ器形・形式を採っているわけではない。

(4) その他の遺物

無機的な遺物の他に，土壙4では貝類及び鳥獣骨の残片が出土している。土壙4の性格から



第13図　出土遺物拓影・実測図3

みて食物残滓であろう。前回の発掘の際，多く検出したアカガイ，ハマグリ，サザエ等が目立った。

他に土壙3より錆のため判読不能な銅銭2点，上部攪乱層より寛永通宝（新銭）4点が出土しているが，特記すべき事項は見あたらない。

今回の出土遺物を通観すると，発掘区域が境内の端であったこともあってか，前回調査の際の出土遺物に比して，少なからず見劣りがするように思われる。1つには，発掘面積が小規模であることも原因だろうが，頂法寺伽藍内での調査地の意味を考えれば，事前に多少とも予測した通り遺構に重点をおいた調査であったと言えよう。

5　調　査　総　括

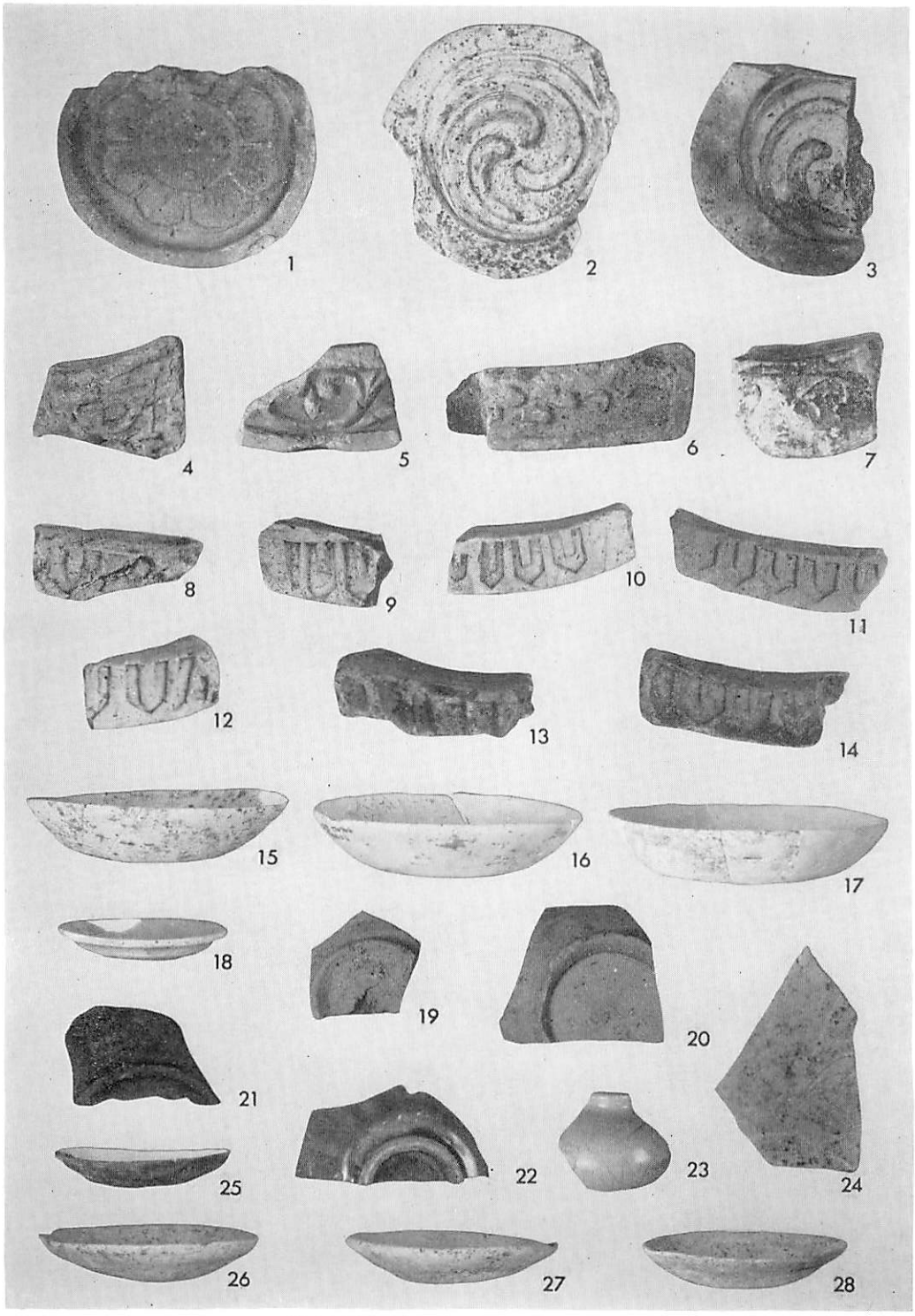
今回の発掘調査の主たる目的は，前回の第一次調査（昭和49年10月～同50年6月）の結果として導かれた幾つかの推論を確認することと，発掘区域の関係で前回に確かめられなかった平安京六角小路の街路遺構を検証することであった。結論から述べれば，限られた狭い面積の比較的短期間の調査であったが，所期の目的を二つながら満足し得たと確信している。

まず，北壁断面図（第6図）に明らかなように，近世の六角堂の火災はこの発掘区の位置でもそれぞれの焼土層の存在で確認される。つまり，上層より元治元年（1864），天明八年(1788)，宝永五年（1708）の六角堂焼亡の年に対応するものと考えられる。

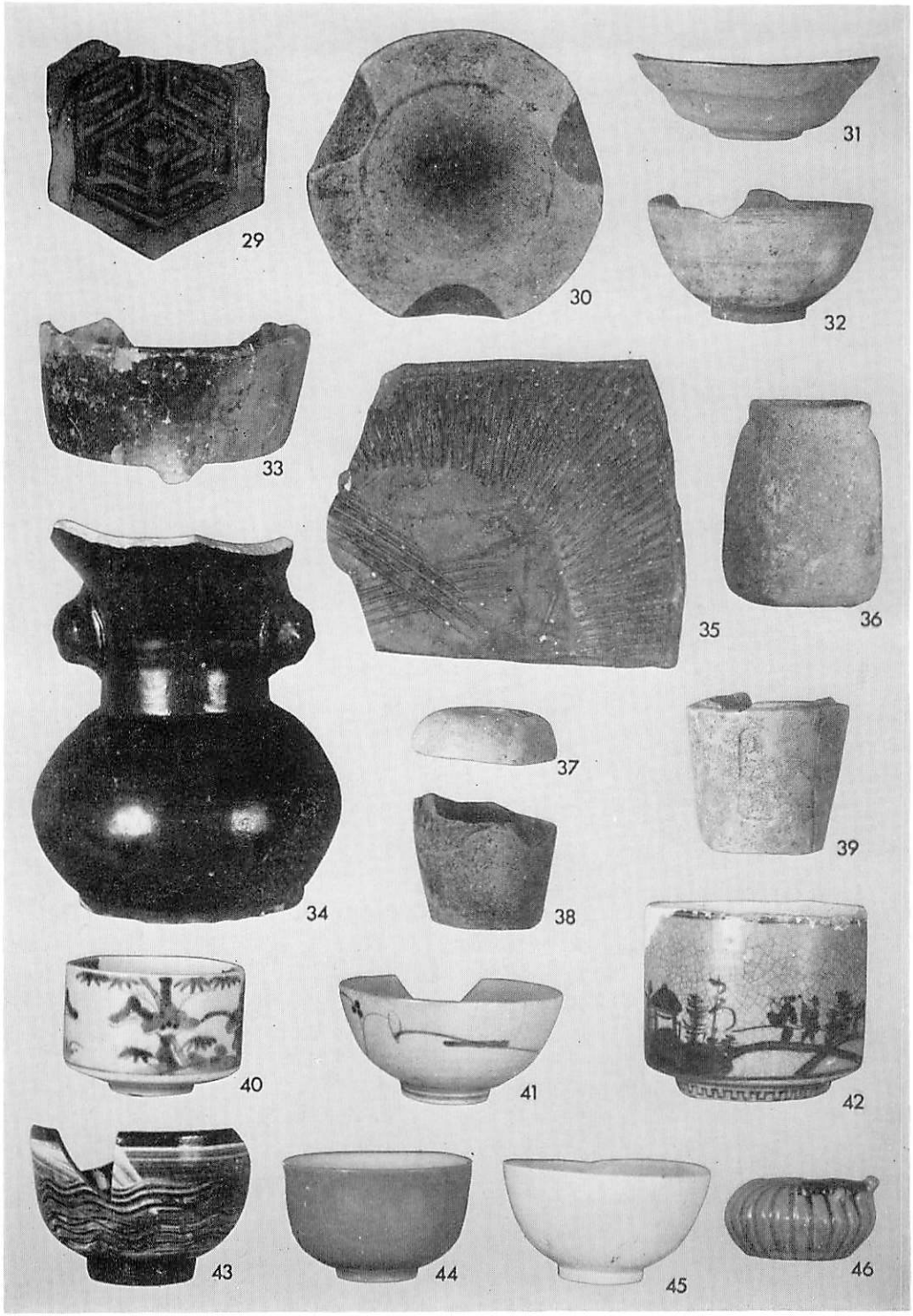
発掘区全体から見れば，広範囲な近世・近代の攪乱のため焼土層の検出は一部に限定されてしまってはいるが，本堂たる六角堂に最も近接する北壁西側で確認された事実は，伴出した近世陶磁器片や瓦片類を傍証として，前回の第一次調査の結論を裏付けるものとなっている。

前記の焼土層より下位では，発掘区中央部で東西に走る溝状遺構が検出されているが，この溝は少なくとも前後三期にわたって使用された形跡がある。検出された溝の構造，伴出した溝中遺物の考察，遺構の層序構成等から判断してこの溝が構築された上限を鎌倉時代末期から室町時代初期と考えることが可能で，下限は一応室町時代末期としてよかろう。この溝状遺構の検出された位置が，六角堂の現在の南門東西中軸線の東側延長線上にある事実は注目してよく，現在の南門の位置が確定した時期を推察させる材料を与えてくれる。

しかし，今回の発掘調査で最も重要だと思われるのは，前記溝状遺構の南側で検出された，



第14図　出土遺物写真 1



第15図　出土遺物写真 2

築垣の基礎に伴うと思われる根石と，柱穴の掘方及びその南側の土壙状掘込跡である。出土遺構・遺物の項目でも言及したように，土壙1から検出された遺物類は，時代的に平安後期〜末期に集中しており，遺物の何点かは鎌倉時代初期にずれこむ可能性も否定できないが，全般的にみて平安時代末期という線は動かし難いように思われる。とすれば，これらの柱穴遺構が何時ごろ構築されたものか判定せねばならないが，別掲の六角堂焼亡年表で推察すると，一応康治二年（1143），建久四年（1193），建仁元年（1201），承元元年（1207）等が考えられる。伴出した遺瓦類では巴文軒丸瓦，剣頭文軒平瓦が多く検出されているので，通説からみても康治二年の火災の際に罹災焼亡した遺構とは認定し難く，建久四年もしくは建仁元年の可能性が強くなってくる。『本朝世紀』によれば，康治二年に罹災した六角堂は，夙に久安二年（1146）には再建されていたようで，その様子は『寺門高僧記』に七（九）間堂として登場している。『寺門高僧記』の記事内容は応保元年（1161）の伽藍について言及していて，平安時代末期の六角堂が大規模な本堂を有していたことも知られる。また，同史料では直接述べられてはいないが，境内の附属建築物もそれらに応じていたことが推察される。具体的にいえば，今回の発掘区南側で検出された柱穴と根石を伴うような築垣が，当時の頂法寺伽藍の南門，六角小路に面して設けられていた蓋然性は頗る高い。根石や柱穴は遺構の項でもふれたように，前後数回にわたって構築され使用された形跡があり，出土瓦類の文様から推しても，建久四年（1193）か建仁元年（1201）の六角堂焼亡の時点まで構築されていたと考えるのが妥当であろう。

六角堂焼亡年表

①	天治二年（1125）	12月
②	康治二年（1143）	12月
③	建久四年（1193）	12月
④	建仁元年（1201）	11月
⑤	承元元年（1207）	4月
⑥	建保元年（1213）	10月
⑦	建保三年（1215）	10月
⑧	寛永四年（1246）	6月
⑨	建長元年（1249）	3月
⑩	文永五年（1268）	1月
⑪	永徳二年（1382）	閏1月
⑫	永享六年（1434）	3月
⑬	応仁元年（1467）	8月
⑭	元和元年（1615）	8月
⑮	元和四年（1618）	8月
⑯	宝永五年（1708）	3月
⑰	天明八年（1788）	1月
⑱	元治元年（1864）	7月

今回検出された遺構が，平安時代最末期の六角小路北側舗設にともなうもの，換言すれば六角堂伽藍南側築垣の基礎であるとすると，当然六角小路の道路面はこの遺構の南側に存在したことになる。この六角小路の推定位置は，古代学協会が作製した平安京条坊復原図の予測とよく一致している。平安時代前・中期の六角小路の推定位置について，今回の調査結果から想定することは頗る困難といえるが，少なくとも平安時代末期においての六角小路の位置を推定した場合，現在の六角小路の通じている位置と大きな隔たりがなかったろうと思われる。

鎌倉時代末期から室町時代に入って，前代より北側に位置する溝状遺構のあたりまで六角堂の築垣が後退するか，あるいは六角小路の道路面が北へ拡張もしくは偏行したものであろうか。有力寺院の門前であるた

め，巷地の発生等も予測されるが，今回の調査結果からは直接巷地の存在を裏付ける証拠は見あたらない。

近世の層位は全体的に攪乱が激しく，面的な遺構は全く検出されていないが，断片的な結果を総合して判断すると，今回の発掘区が六角堂境内南端に該当することは疑いない。出土遺物も築垣等街路の舗設関係のものというよりも，小規模な住宅がそれに準じた建築があったものと想定され，日用雑器類の破片が少なからず出土しているし，当時流通した寛永通宝も検出されている。つまり，近世においては六角小路の位置は再度南側へ移行し，それにともなって築垣等の舗設も発掘区域外南方へ移ったものと考えられる。具体的な当時の頂法寺南限をうかがい知る例として『花洛細見図』，『京都細見図』等の六角堂境内の描写を挙げておく。

現在の六角通りの位置が，六角堂の正面でいつ頃確定したかは推定の域を出ないが，現実では今日の六角通りは，東洞院通りより東側では大部北寄に偏しており，早い段階の六角小路の位置を示唆しているようでもある。

6 後　　記

わずか一ケ月足らずの小規模な発掘調査ではあったが，所期の目的のとおり平安時代末期の六角小路の位置を推定できたことは大きな成果であった。しかも，細部において前回の六角堂跡発掘調査の成果を検討し，調査の過程で生かせた意味は大きい。出土遺物等については今後とも研究を進め，詳細な研究成果を公にすべく努力を続けるつもりである。

前回の調査に引き続き，今回の発掘調査にあたっても京都市文化観光局文化財保護課に多くの御指導を賜った。また本調査の直接依頼者で（財）池坊華道会理事長の池坊宗匠専永氏をはじめとする池坊関係者各位，建設工事担当の大西嘉一氏をはじめとする鹿島建設関係者各位に多大な御協力を頂いた。記して御礼を申し上げる。

平安京六角堂跡第二次
発掘調査概報

発行日　昭和54年2月20日

編集者　財團法人古代學協會
（佐々木英夫）

発行者　財團法人古代學協會
604 京都市中京区
三条大路北高倉小路西
振替京都850番
TEL 075(222)0888

制作　ビクトリー社
604 京都市中京区
油小路通錦上ル
TEL 075(221)1420